
センター長挨拶

東京大学大学院教育学研究科教授
小国 喜弘

2018年度より、野崎教授の後を受け、センター長を務めることとなりました。私の専門は日本教育史で、近年は、1979年養護学校義務化に際しての反対闘争について研究をしております。養護学校義務化に反対した市民の主張の中に、現在のインクルーシブ教育の萌芽的思想が見られます。同時に、彼らの主張には、現在の議論では見落とされているけれども、インクルージョンの問題を考える際には無視できない視点が含まれているように思っています。

2017年度には、「東京大学ビジョン2020」で示されたアクション「人文社会科学分野のさらなる活性化」「学術成果の社会への還元」「産学官民協働拠点の形成」「教育機能の社会への展開」に資する取り組みとして拡充整備事業が採択され、同年9月より二人の特任助教を迎えることができました。

研究活動としては現在3つの柱があります。①ダイバーシティ教育研究：共生社会に向けた教育プログラム、持続的な教育のためのスキームの構築。②インクルーシブ教育研究：学校現場との連携、国連の「持続可能な開発目標」等を踏まえたインクルーシブな学校づくり。③バリアフリー研究：既存の社会を成り立たせている価値や規範の問い直しを含む「バリア」のメカニズムの研究。

①・②について、ダイバーシティ教育定例研究会・インクルーシブ教育定例研究会を新たに立ち上げ、それぞれ隔月で開催し、研究の新たな拠点としての役割を果たすと共に、市民的啓蒙活動に努めています。

障害者差別解消法の施行など法的整備が進む一方で、日本社会における様々な社会的バリアはますます深刻なものになろうとしています。そのような状況において、私たちは微力ではありますが、理論的・実践的な研究をより推進し、その成果を社会に還元すべく活動していきたいと思っております。センターの今後にご期待、ご注目いただきますよう改めてお願い申し上げます。